

# 社会科におけるフィードバック過程を意識した授業開発・実践

—— 単元「住民の政治参加」を事例に ——

井上 奈穂

(キーワード：授業者，観察者，フィードバック)

## I. 問題の所在

社会科には、その教科としての本質が統一されていない教科である(棚橋, 2007, p. 22)。そのため、「よい授業」と評される授業は多いが、それらは一様ではない。同じ授業を同じ場で見ていたとしても、見ていた人の持つ授業観によっては、「よい授業」になったり、「よくない授業」になったりする。授業観は、授業の実践、評価の際にも関わる。そのため、お互いの授業観が異なれば、授業の「よさ」についての対話が難しい状況がある。授業の「よさ」は「提唱者の意図ではなく、実際になされた授業の事実を同じ枠組みで吟味することによってこそ、検証可能になる(棚橋, 2007, p. 23)」。その意味で言えば、まず、授業を評価する前に、その目的と授業を分析するための枠組み、及び、そこから導かれる事実の確定が必要となる<sup>1)</sup>。では、そのためには、どのような方法をとればいいのか。

本稿では、小学校6年生を対象に、開発・実践した社会科の授業を取り上げ、フィードバックの過程を意識した授業開発及び事後の評価の過程を示す。これにより、評価の対象となる授業のあらかじめ確定し、それらを意識した授業開発を行うことで評価の結果を改善へとつなげることが可能となることを示すことを目的としている。

## II. 研究の方法

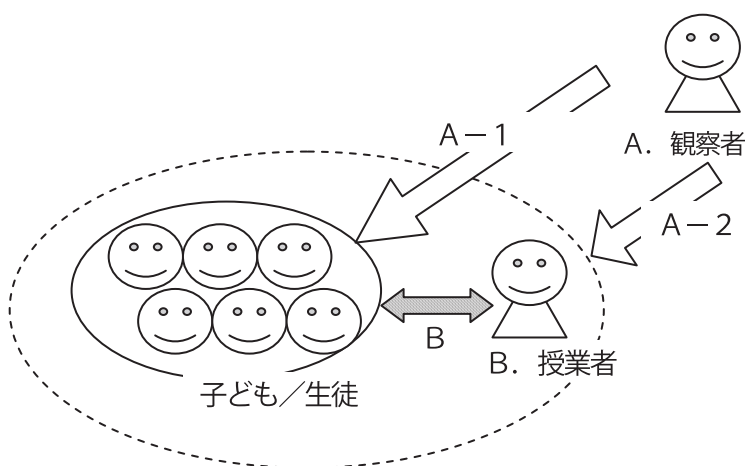


図1. 評価の主体と対象の関係

子ども/生徒の学習状況を的確に評価することは、教育現場において最も必要とされる。なぜなら、的確な評価を通して得られた情報は、子ども/生徒の学力の向上にとって有益だからである。しかし、そうでない場合にもたらされる不利益は大きい。そのため、評価は、常に、妥当性、信頼性についての吟味が不可欠であり、特に評価を行う者の主観をどのように排し、公平な判断を行うのかの検討が求められてきた。左の図1は教育現場における評価の主体と対象の関係をまとめたものである。

これまでの評価に関する研究は、「B. 授業者」を限りなく、「A. 観察者」として位置付けることによって、その妥当性、信頼性を保障しようとし、結果、「A. 観察者」から見た「A-1. 子ども/生徒の実態」もしくは、「A-2. 授業における授業者の指示、発問、教材の実態」を明らかにするという研究が主流となっていた<sup>2)</sup>。授業実践者と研究者の区別が明確でない教科教育(特に社会科教育学)においては、「授業者」が「観察者」に近づくことにより、研究としての科学性を保とうとしていたといえよう。しかし、それは、対象となる授業を「観察する」という意味での質を高めることにはつながるが、そこから得られる多くの情報の全てが「学力保障」につながるわけではない。そのため、観察の質の向上が必ずしも、「学習評価」の機能の向上につながるわけではない。その意味で言えば、必要とされ

ているのは、観察の質の向上ではなく、「授業者」が評価結果を子ども／生徒の学力向上につなげる手立てであり、そのための評価方略である。しかし、当事者である授業者による説明は、経験や個別の状況にその論理が埋没することが多い。そのため、「授業者」の評価方略を明らかにするためには、まず、「A. 観察者」と「B. 授業者」を分離し、授業に対して共有できる事実の確定が不可欠であろう。

以上の問題意識を踏まえ、本稿では、「授業者」の立場から見た「子ども／生徒」の評価方略を明らかにする。そのために、以下の手順を取る。

1. 「観察者」としての分析の視点を設定し、授業に見られる事実の確定を行う。
2. 1を踏まえ、授業における子どもの実態を確定する。
3. 1, 2を踏まえ、本単元を評価し、授業改善の方略を示す。

### Ⅲ. 授業における枠組みの設定

#### 1. 単元「住民の政治参加」の実際

評価の対象とした単元「住民の政治参加」は、2010年度に行われた鳴門教育大学大学院の「教育実践フィールド研究（以下、フィールド研究）」で開発されたものである。

この単元は「小学校社会科における習得・活用型授業の構想と展開」をテーマに、「我が国の政治の働き」に位置づく授業として開発され（井上ほか、2011）、徳島市内のM小学校の6年生において、2010年2月に実践された。具体的には、平成20年3月に告示された学習指導要領（文部科学省、2008）の小学校第6学年の「内容」の「ア. 国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していること」を取り上げ、1つのテーマ（案件）に関して、その賛否や最も適切だと思われる案を有権者自身の直接投票で決める（今井、2000、p.2）「住民投票」を事例として取り上げている。住民投票では、投票結果が当該国民（住民）の生活に直接反映するという理解を踏まえ、投票に伴う有権者自身の責任と、そうであるがゆえに、人々の間の理性的な熟慮と討議（田村、2008、p.2）が必要であるという「民主主義」の概念を習得させることがねらいとなっている。

なお、本単元では「徳島タワーの建設の可否」に関わる住民投票の状況を授業の中で設定し、事例の検討と投票結果そのものの検討を行わせている。以下は取り上げる単元の目標と授業の流れである。

#### 【単元の目標】

- (1) 「徳島タワーの建設」の提案を検討し、地域の政策を巡る住民投票へ参加しようとする意欲を持つことができる。（意欲・関心・態度）
- (2) 提案された事例を検討し、必要な情報を獲得することができる。（技能）
- (3) 提案された事例に対する多様な意見を尊重し、自分なりの意見を表現することができる。（思考・判断・表現）
- (4) 民主主義社会における住民投票の役割と投票という行為に伴う責任を理解することができる。（知識・理解）
- (5) 市民は、投票を通して自らの思い・願いを「政治をする人（行政）」に示す権利を持っていることを理解できる。（知識・理解）

#### 【授業の流れ】

	教師の指示・発問	学習活動
第1次	○東京スカイツリーに関する新聞記事を読ませ、それによる周囲へのその影響を読みとらせる。	・東京スカイツリーについての新聞記事を読み、「いいと思ったこと／困ったこと」をそれぞれ記入し、発表する。(①②)
	○めあての確認 【めあて】徳島にも「東京スカイツリー」のようなタワーが必要だろうか。考えてみよう。	
	○徳島にも同じようなタワーが必要か否かについて意見交換させる。 ○タワー建設の賛否についての意見を表明させる。	・「徳島タワー」を建てることに賛成か反対のいずれであるかを選び、その理由を記入し、発表する。(③④) ・挙手を通して、周りの友達の意見を確認する。

第2次	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「徳島タワーの建設」について、賛成派の市長、反対派の住民Aの主張をそれぞれ理解させる。</li> <li>○徳島にも同じようなタワーが必要か否かについて意見交換させる。</li> <li>○タワー建設の賛否についての意見を表明させる。</li> <li>○2回の「模擬投票」の結果の比較を踏まえ、民主主義社会における投票の意義について理解させる。</li> <li>○政治に参加するときに、大切なことについての意見を書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・賛成派の市長と住民の人の意見をそれぞれワークシートにまとめる。(⑤⑥)</li> <li>・「徳島タワー」を建てることに賛成か反対のいずれであるかを選び、その理由を記入し、発表する。(⑦⑧)</li> <li>・挙手を通して、周りの友達の意見を確認する。</li> <li>・投票結果は、現実の社会に直接反映すること、また、やり直しは聞かないことを確認する。</li> <li>・政治に参加する時に、大切だと思うことについての意見をまとめる。(⑨)</li> </ul>
-----	--	---

(「学習活動」の①～⑨は対応するワークシートの番号)

## 2. 単元「住民の政治参加」を評価するための枠組み

本単元の目標から、授業を評価するための枠組みを示したものが以下の図2である。この枠組みは、本単元を通して期待される子どもの思考を想定し、作成している。子どもは、「徳島タワー」について示される知識を理解した上で、賛成／反対の意見の表明をする。目標の(1)(2)(3)を満たす子どもは、提案された事例に対する多様な意見を尊重し、「事例についての知識」を獲得した上で(目標(3))、自らの意見の「根拠とする知識」となる必要な情報の獲得を通して(目標(2))、「徳島タワーの建設」についての模擬投票に参加し、「意見の表明」を行う(目標(1))ことが期待される。また、模擬投票の振り返りを通して、投票という行為に伴う責任を理解(目標(4))し、さらに、投票を通して、自らの思い・願いを「行政」に伝えることは市民の権利であること(目標(5))することで「民主主義についての理解」を深めることが期待されている。図2に示すように、「事例についての知識」→「根拠とする知識」と入れ子状に積み重なることで、よりよい「意見の表明」につながる。また、そのような決定の段階と結果を、俯瞰することで「民主主義についての理解」が図られる。

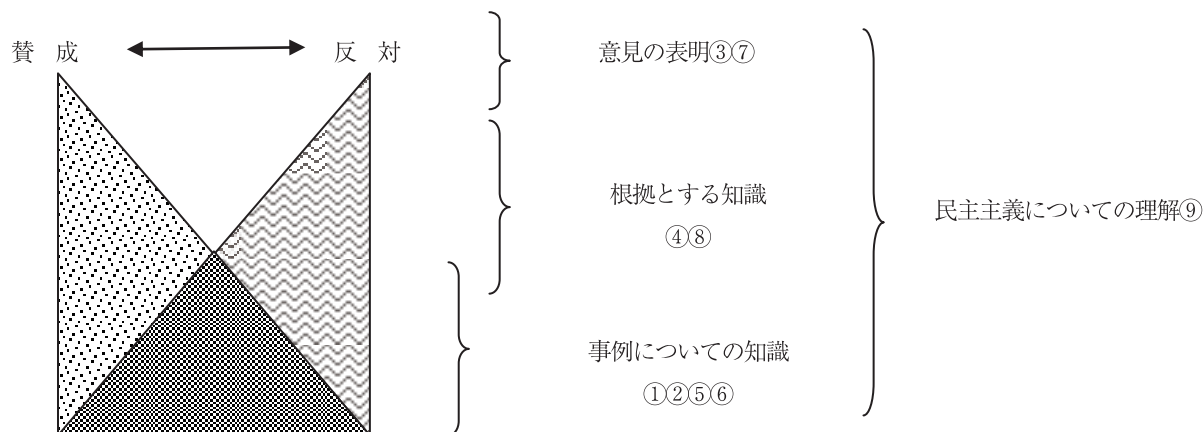


図2. 単元「住民の政治参加」を評価するための枠組み

本稿では、この図2に示されるような枠組みを踏まえ、子どもの実態を把握する。そのための資料として、プロトコル分析等が考えられるが、本稿では、子どもの使用したワークシートからそれを把握することとした。以下は本単元の実施にあたり、使用したワークシートである。なお、ワークシート上にある①～⑨と、図2の①～⑨は対応関係にある。

### 【本単元で用いたワークシート】

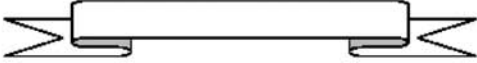
第1次におけるワークシートの使い方を見ていこう。まず、「今日のためて」の確認をおこなっている。そして、「1. 東京スカイツリーについての新聞を読んで…」では、「いいと思ったこと(①)」、「困ったこと(②)」を抜き出させている。これは、投票をさせる際の「事例についての知識」に当たる。次に、「2. 徳島タワーを建てることについてあなたの意見は?」と問いかけ、「私は(③)です」と、「意見の表明」を行わせ、「なぜなら……④」とその「根拠とする知識」を挙げさせている。

No.1

### 徳島タワー建設について

6年( )組 名前( )

今日のめあて



**1. 東京スカイツリーについての新聞を読んで…**

いいと思ったこと

①

困ったこと

②

**2. 徳島タワーを建てることについてあなたの意見は？**

私は ( ③ ) です。

なぜなら…

④

**3. タワーを建てたい市長さんとそれに反対している住民の人の意見をメモしよう。**

メモ

市長さん

⑤

---

住民の人

⑥

**4. 徳島タワーを建てることについてもう一度、あなたの意見は？**

もう一度考えた結果、私は ( ⑦ ) です。

なぜなら…

⑧

**5. あなたが政治に参加する際には、何が大切だと思いましたか？**

⑨

第2次におけるワークシートの使い方を見ていこう。まず、「3. タワーを建てたい市長さんとそれに反対している住民の人の意見をメモしよう」では、「市長さん (⑤)」、「住民の人 (⑥)」の主張を聞いて、理解したことをまとめさせている。そして、「4. 徳島タワーを建てることについてもう一度、あなたの意見は？」と問いかけ、「もう一度考えた結果、私は (⑦) です」と、「意見の表明」を行わせ、「なぜなら… (⑧)」とその「根拠とする知識」を挙げさせている。最後に、模擬投票の結果を振り返らせ、「5. あなたが政治に参加する際には、何が大切だと思いましたか？ (⑨)」と問いかけ、単

元で行った模擬投票の子どもなりの意義・理解したことを表現させている。

以上のように、本単元を評価するための枠組みに対応したワークシートを分析することで、以下の点が明らかになると言える。

- ・どのような情報を獲得できているのか。(ワークシート①②⑤⑥)
- ・どのような情報が根拠となっているのか。(ワークシート④⑧)
- ・民主主義の基本的な考え方を概念化できているか。(ワークシート⑨)

#### Ⅳ. 授業における事実の確定・評価

##### 1. 第1次の場合

##### (1) ワークシート①②の分析

本単元は、2011年2月にM小学校6学年1組(27名)、2組(27名)で実践した。授業で用いたワークシートは全員から回収することができたため、有効数54名として分析を行った。

まず、ワークシート①②では、スカイツリーについての新聞を読んで、「いいと思ったこと」「困ったこと」を読み取らせる場面である。表2は、新聞に示されている項目のうち、メリットにつながるものとデメリットにつながるものを列挙したものである。新聞の読解を通して、それぞれの項目を情報として獲得することが期待されている。

表2. 新聞に書かれている項目

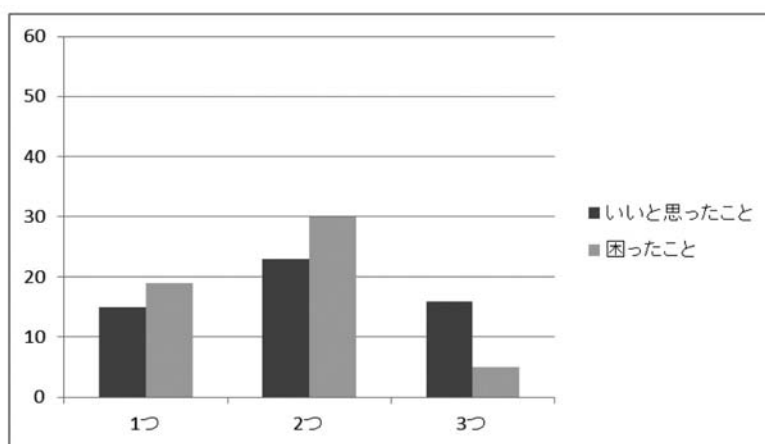
項目	記載されている事項	
いいと思ったこと	観光	タワーが建つ地域は観光の名所になる
	活性化	地域が元気になると期待されている。
	地デジ1	ビルや山に邪魔されることなく電波を飛ばせる
困ったこと	ゴミ・トイレ	(観光客による)にぎわいの反面、ゴミやトイレの対策に地域の人は頭を悩ませている。
	マナー	商店街では「マナーを守って」という(観光客への)呼びかけを行っている。
	地デジ2	アナログ放送の電波に比べ地デジの電波は弱い。
	取り合い	スカイツリーの建設はどこに建てるかで、東京都内や、さいたま県で、とりあいになった。

以下、子どもが抜き出した項目の数及び抜き出した項目の内訳の分析を示す。

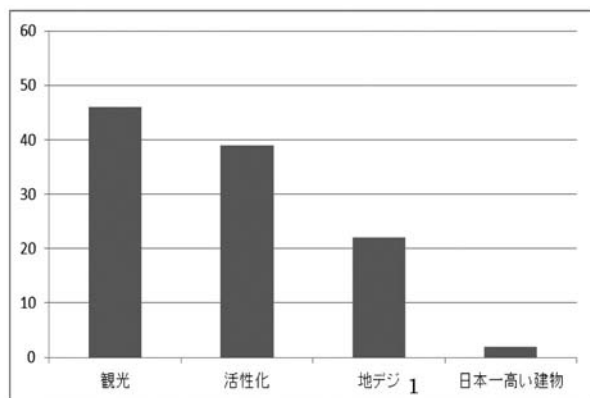
表2に示した事項の内、児童が読み取った項目の個数をまとめたものが右のグラフ1である。

グラフ1に示すようにあるように、「いいと思ったこと」「困ったこと」ともに2つ挙げている児童が最も多い。

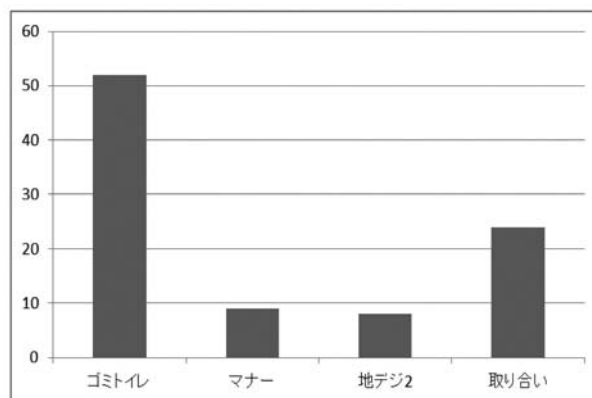
次に、グラフ2を見ると、「いいと思ったこと」については、観光(46名)、



グラフ1. 新聞から読み取ったに記載した項目数



グラフ2. 「いいと思ったこと」の根拠の項目数



グラフ3. 「困ったこと」の根拠の項目数

活性化 (38名), 地デジ1 (22名), 「日本一高い建物」(2名) が挙げられていた。また, 「困ったこと」については, ゴミトイレ (52名), マナー (9名), 地デジ (8名), 取り合い (24名) であることが分かる。

これらのことから, 新聞からは「いいと思ったこと」として, 観光, 活性化, 「困ったこと」として, ゴミトイレ, 取り合いといった項目の読み取りが多いことが分かる。では, これら読み取られた項目は投票の1回目にはどのような影響を与えているだろうか。

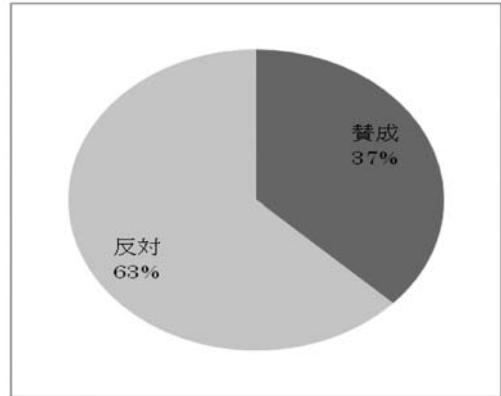
**(2) ワークシート③④の分析**

グラフ4は投票1回目の結果を示したものである。第1回目では, 37%が賛成, 63%が反対となっている。

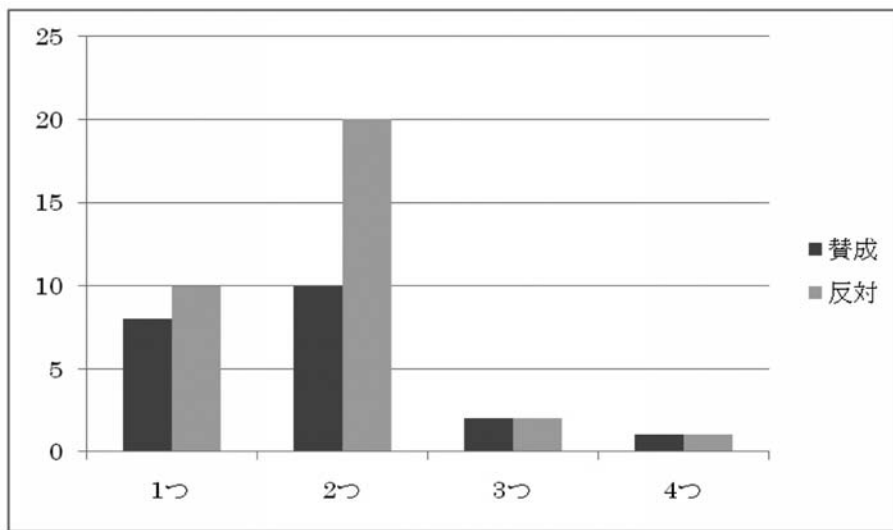
この「意見の表明」に対し, いくつの根拠が示されているのか, その数をまとめたものがグラフ5である。

グラフ4にあるように, 賛成37%, 反対63%とっており, 反対の児童の方が多い。また, グラフ5にあるように, これらの判断は2つ以上の根拠に基づいたものが多くなっている。では, それぞれの判断の根拠となったものは何か。ワークシートの記述を整理したものが次のグラフ6 (賛成), グラフ7 (反対) である。

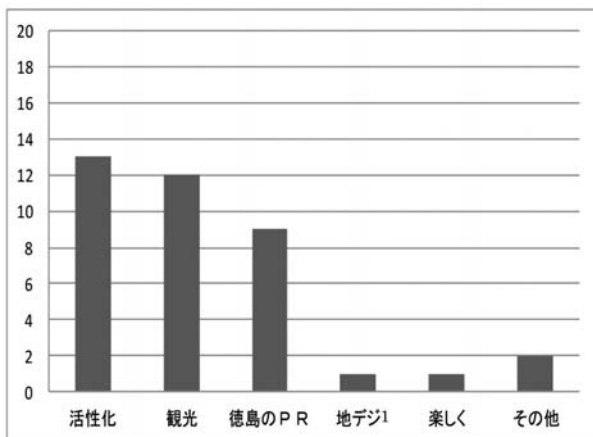
グラフ6, 7にある活性化, 観光, 地デジ1, マナーは, 新聞から読み取ることのできる項目である。徳島のPR, 楽しく,



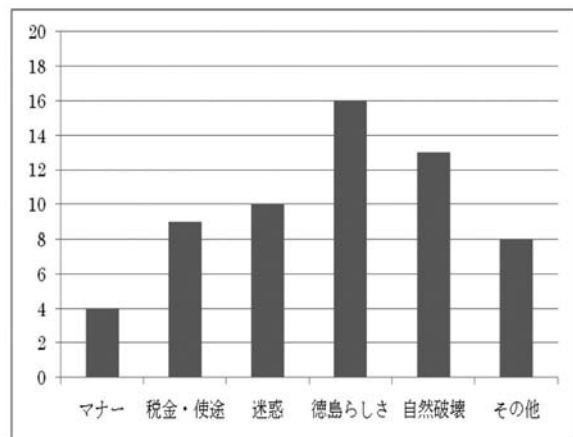
グラフ4. 第1回目投票結果



グラフ5. 第1回目投票の根拠とした項目数



グラフ6. 第1回目「賛成」の根拠の項目数



グラフ7. 第1回目「反対」の根拠の項目数

税金・使途，迷惑，徳島らしさ，自然破壊は，新聞にはない情報であり，児童の経験から出てきた根拠といえる。

以上のことから「賛成」の児童は新聞を根拠としているのに対し，「反対」の児童は経験を根拠としているといえる。

## 2. 第2次の場合

### (1) ワークシート⑤⑥の分析

第2次では，市長が賛成，住民が反対の立場に立った主張を述べることにより，第2回の投票のための情報を提示している。表3は市長，住民の立場から示された根拠をまとめたものである。

市民，住民により提示された情報は，どれくらい第2回の投票に影響を与えていると考えられるだろうか。

表3. 市長・住民の立場が示した項目

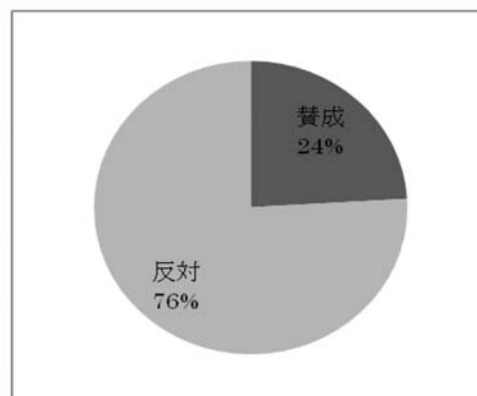
	項目	示した内容
市長（賛成派）	活性化	徳島タワーをつくと徳島が活性化する
	雇用	雇用の場が確保される
	地デジ3	地上デジタルが楽しめる
住民（反対派）	税金使途	タワー建設のために過剰な税金がかかる
	健康障害	タワーから出る電磁波が人体に悪い
	自然破壊	自然が破壊される
	徳島らしさ	徳島らしさが無くなる
	地域変化	地域が変化してしまう

### (2) ワークシート⑦⑧の分析

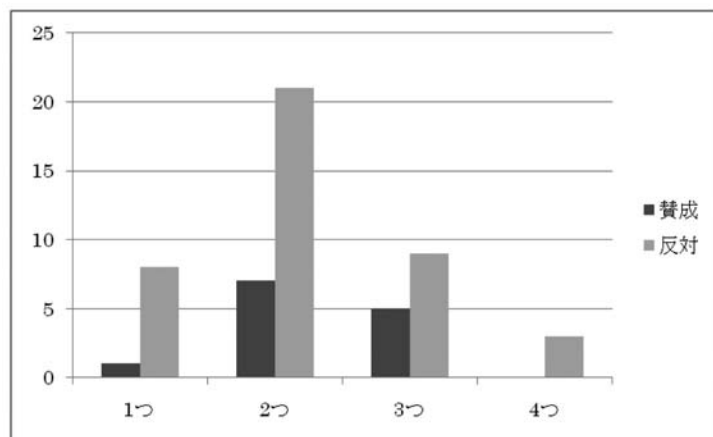
グラフ8は投票2回目目の結果を示したものである。第2回目では，24%が賛成，76%が反対となっている。ここでの「意見の表明」の中でいくつの根拠がしめされているのか，その数をまとめたものが以下のグラフ9である

まず，グラフ8にあるように，賛成24%，反対76%とっており，反対の児童の方が多い。また，グラフ9にあるように，これらの判断は2つ以上の根拠に基づいたものが多くなっている。

では，それぞれの判断の根拠となったものは何か。ワークシートの記述を整理したものが次頁のグラフ10（賛成），グラフ11（反対）である。



グラフ8. 第2回目投票結果

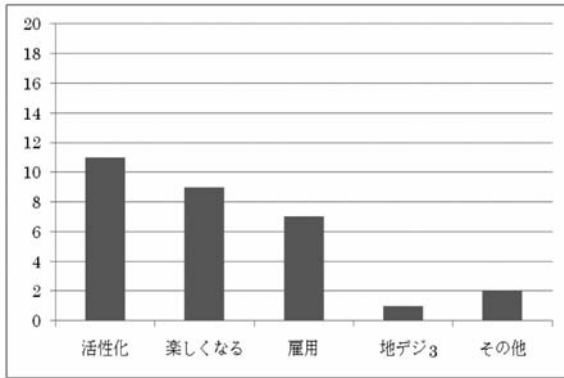


グラフ9. 第2回目投票の根拠とした項目数

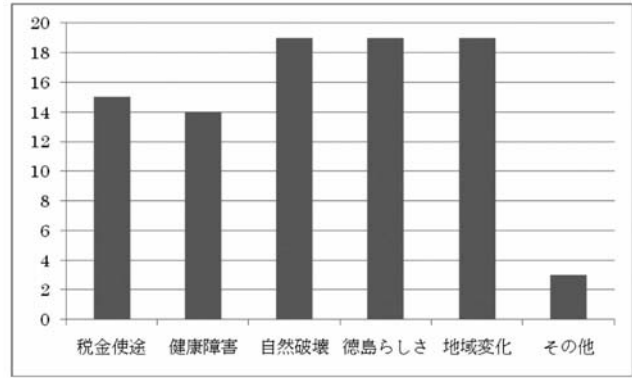
グラフ10, 11に示された項目の中で，市長，住民により提示されたものでないのは，「楽しくなる」とその他となっている。このことから，提示されている情報が中心に用いられたことが分かる。

### (3) ワークシート⑨の分析

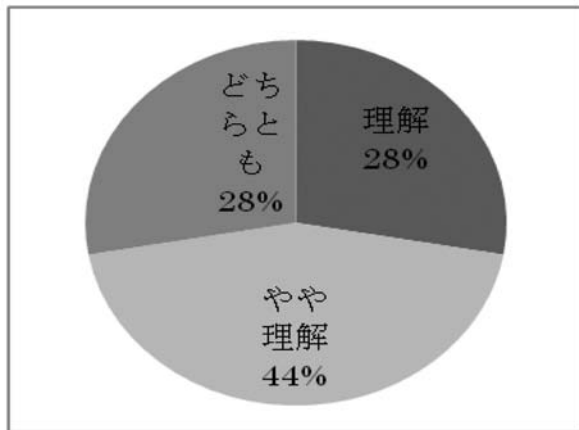
ワークシート⑨では，また，第2次の終結部では，「あなたが政治に参加するときには何が重要だと思いませんか?」と問い，教室の中で行われた住民投票のプロセスを



グラフ10. 第2回目「賛成」の根拠の項目数



グラフ11. 第2回目「反対」の根拠の項目数



グラフ12. 民主主義の基本的な考え方の理解

通して理解した民主主義の基本的な考え方を示すことが求められる。

左のグラフ12は、多様な意見を踏まえ投票することと投票に生じる責任に言及しているものを「理解」（例：てきとうに投票するのではなくて、良く考えて投票するのが大切だと思いました。まず提案に対してしっかり自分の考えを持ち、投票するのが大切だと思った。）、事例に則して多様な意見を踏まえることに言及しているもの「やや理解」（例：自分がどちらかを決めるときはちゃんと話を聞いて決める。自分の意見を最初に伝えて、伝えるだけでなく、相手の話を聞くのが大切だと思いました。）、授業で提示した事例に言及しているもの「どちらともいえない」（例：最初は徳島タワーができれば町が

にぎわったりしていいだろうと思ったけど、自然がなくなったりしたらちょっといやだなと思った）の3つに分けて整理したものである。

グラフ12から児童の28%はねらいとした民主主義の基本的な考え方に到達したと判断できるが、その44%は多様な意見を踏まえる必要性を事例に則して理解しているが、投票に伴う責任の理解には至っていない。さらに28%は授業で提示した事例についての言及にとどまっており、授業の一連の過程の背景にある民主主義の基本的な考え方の理解に到達していないことが指摘できる。

### 3. 単元の評価結果

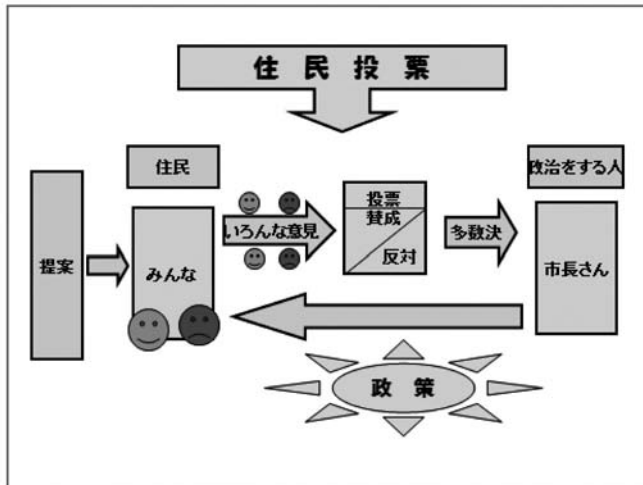
ワークシートの分析結果は以下のようにまとめられる。

- 第1回目の投票の傾向：「賛成」は新聞を根拠としているのに対し、「反対」は自らの経験を根拠としている児童が多い。
- 第2回目の投票の傾向：「賛成」「反対」の根拠として、市長、住民の主張で挙げられた項目を挙げた児童が多い。
- 目標（4）に掲げた民主主義の基本的な考え方に到達したと判断できる児童は28%、多様な意見を踏まえる必要性は理解しているが、投票に伴う責任の理解には至っていない児童が44%、授業で提示した事例の言及にとどまっている児童が28%である。
- 目標（5）に掲げた民主主義の基本的な考え方に到達した児童はいない。

以上を踏まえ、本時の目標がどれくらい達成されたかを確認しよう。

まず、第1回目の投票は、賛成より反対が多いが、資料である新聞は主に「賛成」の判断の根拠となっている。しかし、新聞の内容が読み取れていないわけではない。このことから、新聞の内容を自分なりに咀嚼した上で、新聞にない情報を自分の経験から補った児童が多いことが推察される。対して、第2回目の投票は、同じく賛成より反対が多いものの、賛成の割合は37%（20名）から28%（15名）と少なくなっており、5名の児童が意見を変更している。また、その根拠は、市長、住民により提示されたものと重なるものが多く、市長、住民の主張





の提示が児童の判断に影響を与えたことが推察される。以上のことから、児童は第1回では新聞、自らの経験、第2回では市長、住民の主張が投票に影響を与えたと推察されことから、目標(1)、(2)、(3)に掲げた多様な意見を踏まえた自分なりの意見をまとめること・表現することは一定程度達成されていることが指摘できる。また、想定した民主主義の基本的な考えの獲得を目指す目標(4)へ到達した児童は全体の28%であり、残り72%が民主主義の基本的な考え方を概念として理解していない。この背景には、目標(2)(3)に関わる資料の読解・整理にかけた時間に対し、終結部の概念図の説明に十分な時間が割けなかった点を要因として挙げることができる。生徒の学力

保障の手立てとして、別途概念図を整理する必要がある。本単元では、この評価後、以下の図をワークシートにコピーし、子どもへの返却することで、その手立てとした。

また、民主主義の基本的な考えの獲得を掲げたものであるが、目標(5)への到達を判断できるワークシートの記述はなかった。この背景には、本時は「徳島タワーの建設」という政策を巡る判断が中心であったため、授業構成上、児童自身が自らの思い・願いを表現する場面がなかった点を要因として挙げられる。そのため、生徒の学力保障の手立てとしては、本時に即した何らかの対策と言うより、別途の授業計画の立案が適当であるといえる。

## V. フィードバックの過程を意識した授業開発・実践の意義

本稿では、授業開発・評価の段階を明示し、授業改善につながる授業評価の事例を示した。

授業開発・実践の評価は、その根拠となる事実とその分析が必要となる。また、授業開発・実践におけるフィードバックの過程は、その目的によって得られた結果の活用が異なる。本稿で取り上げた単元では、「事実」を収集するための手法とその事実を可視化し、さらに、その結果を生徒の学力保障、授業改善のための手立てへとつながる根拠として用いた。

授業を評価する場合、立場・手法により様々な事実を集めることができる。数ある手法を漠然と用いて、授業分析・評価を行うのではなく、その目的と、それに沿った枠組みの明確化が必要となる。本稿で示した授業の構成に対応したワークシートの分析もその方法の1つといえよう。

### 【謝辞】

本稿で行った分析にあたっては、中野輝氏にご協力いただいた。また、本研究に当たり、授業開発、ワークシートの分析にご協力いただいた先生方及び院生の皆さんに心から感謝します。

### 【参考文献・論文】

井上奈穂ほか「小学校社会科における習得・活用型授業の構想と展開－単元「住民の政治参加」の場合－」『鳴門教育大学授業実践研究』第11号、2012年、pp. 59-65。

今井一『住民投票－観客民主主義を超えて－』岩波新書、2000年。

棚橋健治『社会科の授業診断－よい授業に潜む危うさ研究－』明治図書、2007年。

田村哲樹『熟議の理由－民主主義の政治理論－』勁草書房、2008年。

文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、2008年

1) つまり、行われた授業を記述した時点で、解釈が入るため、同じ授業でもその方法・形式が違えば、全く異

なる事実が抽出される。的場は、この問題を解決するために、「その記述の形式性に発話の解釈を明示する方法がある」としている。

的場正美「授業分析における叙述形式の検証 — 記号による叙述の再現性 = 可逆性の検証 —」日本教育学会第68回大会、発表要旨、柴田好章「逐語記録にもとづく質的な授業分析への量的手法の結合に関する研究」平成10～11年度科学研究費補助金（課題研究（A） 課題番号：10780107）報告書。

2) まず、A-1. に位置づく研究では①アンケートや先行研究の分析により、子ども／生徒の実態を明らかにするもの、②授業の結果として見られる生徒の実態を明らかにするものが挙げられる。

このような研究の先駆的なものとして、①は藤井千之助の研究（藤井千之助『歴史意識の理論的・実証的研究』風間書房、1985年）、②は重松鷹泰・上田薫による研究（重松鷹泰・上田薫『RR方式 — 子どもの思考体制の研究 —』黎明書房、1965年）が挙げられる。これらの研究により、限定的な結論ではあるが、対象となる子ども／生徒集団の実態が、論理的、統計的に示され、藤井、重松らの研究の後も多くの研究が蓄積されている。このような研究は、授業者の生徒理解を促す上で、有効な情報を与える。

一方、A-2. に位置づく研究では③授業もしくは教材の「有効性」を明らかにするものが挙げられる。このような研究の先駆的なものとして、(3) 池野らによる一連の共同研究（池野範男ほか（2008）、中学生の平和意識・認識の変容に関する実証的研究 — 単元「国際平和を考える」の実践・評価・比較を通して —、広島平和科学、30、広島大学平和科学研究センター、pp. 71-93.）がある。池野らは対象となる授業・授業構成論もしくは教材が示し、それに基づいた授業を実施し、その後、当該実践を通して見られた生徒の変容をプレテスト、ポストテストから判断し、授業・授業構成論もしくは教材の有効性を示す。このような研究は、実施する授業・授業構成論、もしくは使用する教材として何が適切かを選択する上で有効な情報を与える。

# **The Strategies for Lesson Reflection in Social Studies**

— A Case Study of “The Political Participation of Citizens” —

INOUE Naho

An agreement regarding the essence of social studies as a subject is yet to be reached; hence, this topic has received attention instead of analyzing best practices for actual classroom teaching. However, choosing methods to assess lessons should be based on the essence of social studies. In other words, there was a need to assess lessons within the same framework.

This study has explained a strategy to assess lessons in social studies. First, the study explored the lesson development process that considered feedback. Second, the study analyzed the assessment process as a result of lesson practice. Finally, a lesson improvement plan was proposed, which was drawn from analyzing results.

This study clearly showed that analytical framework clarification was in line with the purpose of assessment and is linked to improved lesson assessment.